

令和 4 年度

**事業の課題に対する
健康局の取組みについて**

大阪市における在宅医療・介護連携推進事業のめざすべき将来像

医療と介護の両方を必要とする状態の高齢者が、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、多職種協働により在宅医療と介護を一体的に提供できる体制が構築されている。

めざすべき将来像に向けての局の課題

1. 事業の進捗管理
2. 広域連携の仕組みづくり
3. 区役所・相談支援室に対する積極的支援

課題 1 事業の進捗管理

課題 1 に対する今年度の取組み

(1) 評価指標での進捗管理

令和4年度 大阪市高齢者実態調査（本人・介護支援専門員・介護施設）結果の把握
追加設問：ACPの取組み、在宅で看取りにおける課題(介護支援専門員)

(2) 区役所・相談支援室への取組み調査からみる事業の進捗管理

➡ 資料 2 にて報告

課題 2 広域連携の仕組みづくり

課題 2 に対する今年度の取組み

- ① ACPを実践していくための多職種研修会の開催
- ② 大阪市 在宅医療・介護連携相談支援室活動報告会の開催

市内基本保健医療圏域ごとの多職種研修会の開催

【内 容】『地域でつなぐアドバンスケアプランニング（ACP）』

講師：国立長寿医療研究センター 緩和ケア診療部/EOLケアチーム 西川満則氏
（株）Old-Rookie 快護相談所 和び咲び 大城京子氏

【日 時】令和4年9月19日（月・祝）

午前 （北部）北区、都島区、淀川区、東淀川区、旭区
（東部）中央区、天王寺区、浪速区、東成区、生野区、城東区、鶴見区

台風のため中止

午後 （西部）福島区、此花区、西区、港区、大正区、西淀川区
（南部）阿倍野区、住之江区、住吉区、東住吉区、平野区、西成区

【場 所】平野区民センター



実施済

【日 時】令和4年11月10日（木） 午後2時～4時

【場 所】中央区民センター

多職種研修会 アンケート結果

【参加者】 113名

【回収数】 107名 (回収率 : 94.7%)

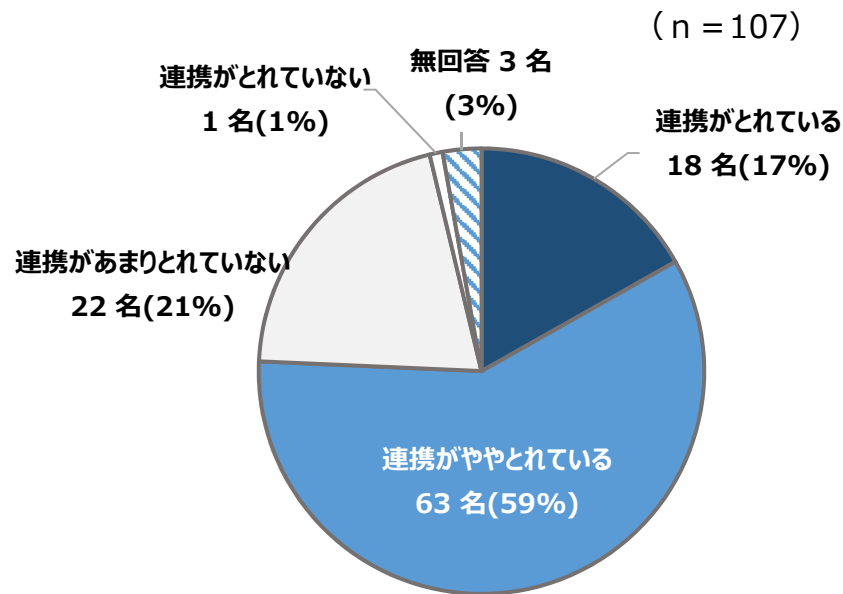
1) 所属

病院	診療所・クリニック	歯科医院	薬局	訪問看護ステーション	地域包括支援センター	居宅介護支援事業所	訪問介護事業所等	区役所等	相談支援室	その他	計
5 (4.7%)	2 (1.9%)	6 (5.6%)	15 (14%)	0 (0%)	27 (25.2%)	7 (6.5%)	0 (0%)	28 (26.2%)	15 (14.0%)	2 (1.9%)	107 (100%)

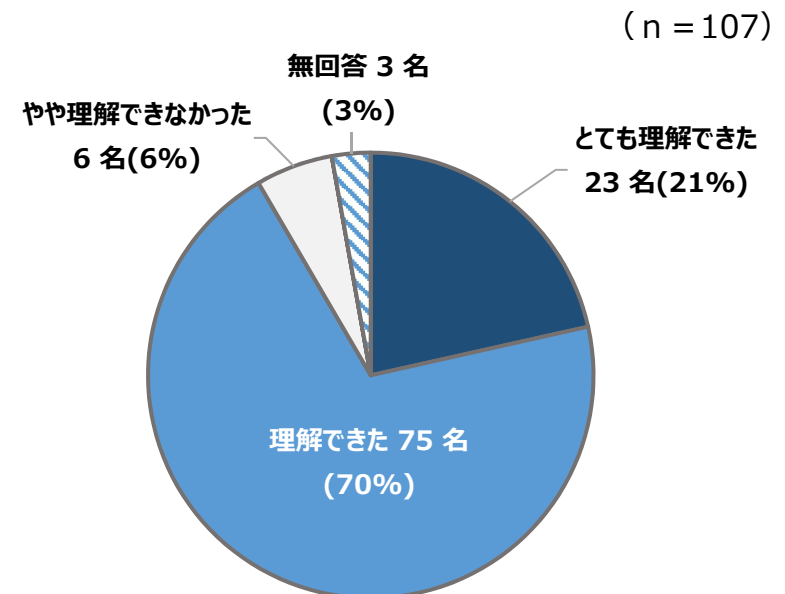
2) 職種

医師	歯科医師	薬剤師	保健師	看護師	居宅介護支援専門員	社会福祉士	介護福祉士	事務職	その他	計
2 (1.9%)	5 (4.7%)	15 (14%)	12 (11.2%)	20 (18.7%)	16 (15%)	17 (15.9%)	1 (0.9%)	15 (14%)	4 (3.7%)	107 (100%)

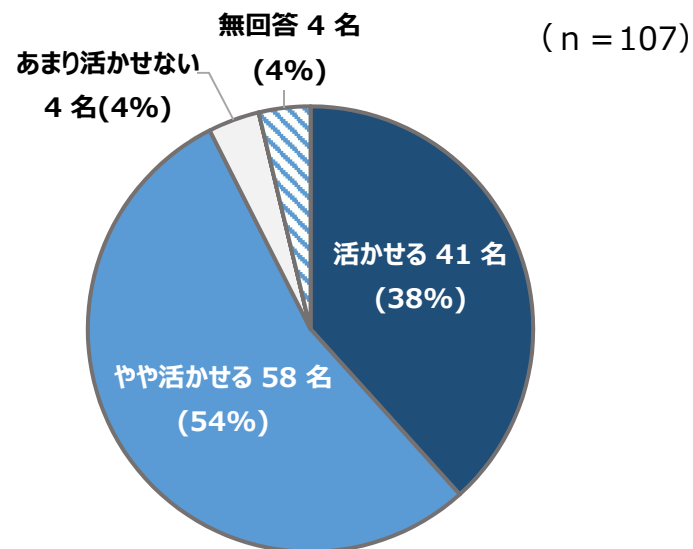
3) 他職種との連携について



4) 研修内容の理解について



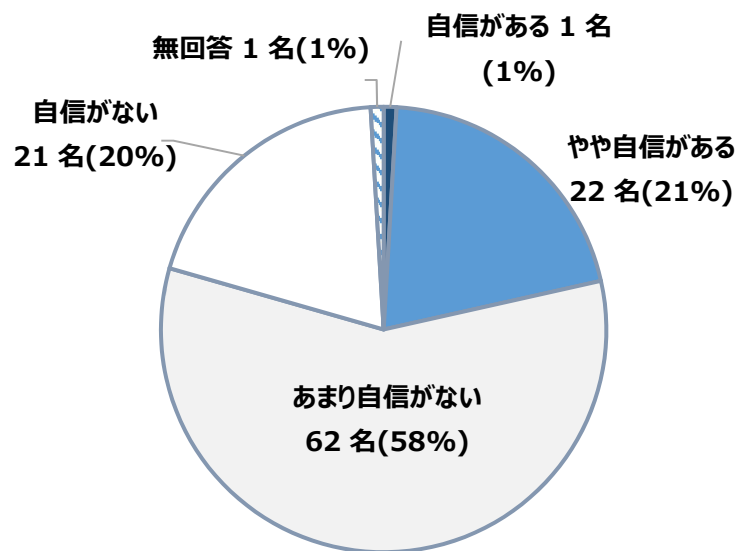
5) 今後の業務にどの程度活かせるか



6) ACP支援について①

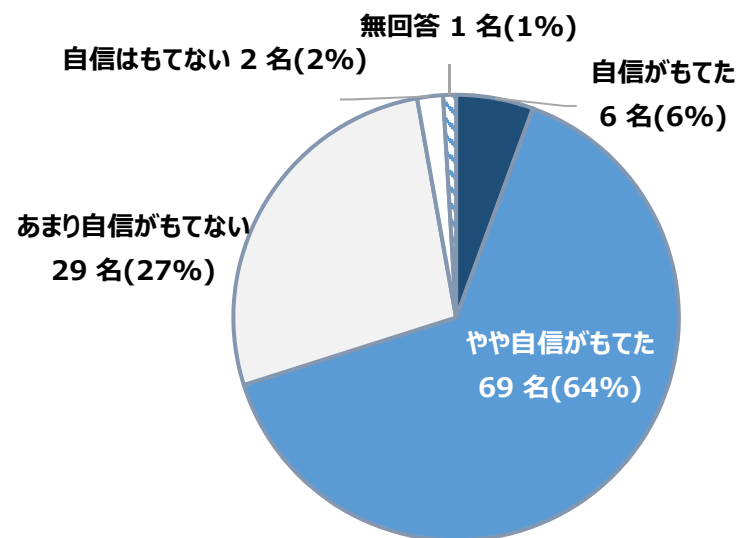
【研修参加前】

(n = 107)



【研修参加後】

(n = 107)



ACP支援に対して、

研修参加前は、「**自信がある**」・「**やや自信がある**」と回答した割合が**22%**

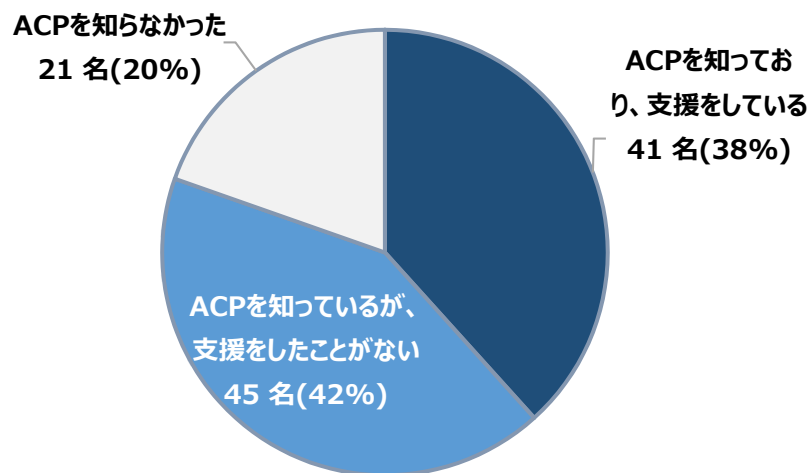


研修参加後では、「**自信がもてた**」・「**やや自信がもてた**」と回答した割合が**70%**

6) ACP支援について②

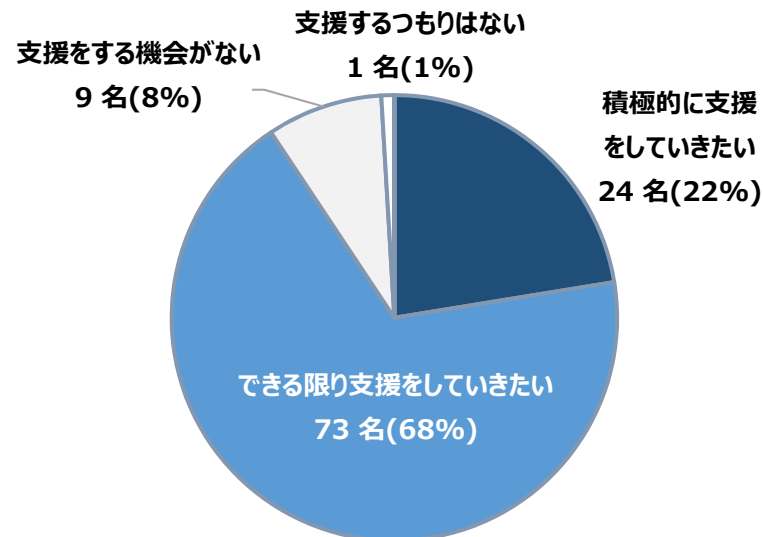
【参加前のACP支援の状況】

(n = 107)



【参加後のACP支援の意向】

(n = 107)



今後のACP支援の意向について、

研修参加前は、「**ACPを知っており、支援している**」と回答した割合が**38%**
「**ACPを知っているが、支援をしたことがない**」と回答した割合が**42%**



研修参加後は、「**積極的に支援をしていきたい**」と回答した割合が**22%**
「**できる限り支援をしていきたい**」と回答した割合が**68%**

自由記載

【研修会の内容について】

- ・本日の研修で初めてACPのことを知りました
- ・ロールプレイであった、「反復」と「沈黙」は日頃の業務でも活かすことができるなと思いました
- ・日頃の支援業務の中で自分の最期（生き方や入院等の医療ケアなど）について自分の思いを紙に書いたり、家族に自分の思いを伝えてない人が多いと感じています。自分の生き方を自分で決めるために備えておくことを地域の方に伝えているつもりですが、肝心な方に伝わっていないもどかしさを感じます
病院など医療機関から患者さまにもっと積極的に働きかけてほしいと思うので、病院での講演会（患者や地域向けの）がもっと普及すると良いのにと感じます
- ・現場で悩んでいるのは家族のいる人のACPではなく家族のいない人のACPが大半なので、家族がおらず（いても疎遠）本人だけの意思しか確認できない事例をぜひ聞きたい
- ・ACPの本人の意志の実現は大切だが、家族はやはり生きてほしいとってしまう
最期の選択を医療に頼るのか、本当に難しいと思う

【今後の希望するテーマ】

- ・同じテーマでもグループワークなどを取り入れて行っていただきたいです
- ・身寄りがない利用者さん、患者さんをどうサポートするか
- ・地域包括ケアシステムにおける歯科医師、薬剤師と介護の連携

来年度にむけて

今年度は基本保健医療圏域ごとで研修会の開催を計画していたが、台風の接近により急遽中止となり、再度日程調整をし、大阪市全域での研修会となった。

来年度は、基本保健医療圏域ごとにグループワークを取り入れ、多職種の役割について相互理解が深まるような研修会の開催を検討したい。

【日 時】 令和5年2月4日（土） 午後

【内 容】 基調講演 『ソーシャルキャピタルと持続可能な社会、地域包括ケアシステム（仮）』

講師：国立保健医療科学院 院長 曾根智史氏

報告 大阪市内「在宅医療・介護連携相談支援室」の活動報告

【場 所】 大阪市中心公会堂

課題3 区役所・相談支援室に対する積極的支援

課題3に対する今年度の取組み

- (1) 区役所への支援
 - ①『在宅医療・介護連携推進事業 区担当者等説明会』の実施 ➡ 前回報告済
 - ②区役所への個別支援
(人事異動に伴う区役所担当者の交代、取組み調査より支援の対象を検討)
- (2) 相談支援室への支援
 - ①新任コーディネーターへの個別支援
 - ②人材育成チェックリストの作成
- (3) 区役所・コーディネーターのスキルアップと連携
 - ①『区役所実務者、在宅医療・介護連携支援コーディネーター合同研修会』の開催
 - ②地域包括ケアシステム推進研修会（4事業合同研修会）の開催

① 区役所への支援

継続実施中

【区役所への個別支援】

令和3年度の取組み調査より支援が必要な区を抽出し、4月より支援開始
担当者を訪問して、事業および昨年度の区役所の取組み状況について説明
以降、適宜取組み状況を確認し、支援を継続

- ➡ ・大阪市高齢者等在宅医療・介護連携推進事業実施マニュアルに沿って事業をどのように進めていけばよいか説明
- ・区役所の役割、具体的な取組み事例について提示
例) 住民への普及啓発について
 - ・広報紙の活用方法、リーフレットの内容の例示
 - ・講演会講師の相談 等

② 相談支援室への支援

継続実施中

【新任コーディネーターへの個別支援】

- ・経験の浅いコーディネーターが配置されている区に対して、面談や電話にて支援
- ・人材育成チェックリストを用い、達成度を確認
- ・報告様式の作成、取組み報告の資料の作成について支援

【相談支援室への支援】

- ・コーディネーター連絡会で情報共有のため各区の相談支援室の取組みについて発表
- ・活動報告会に向けて、ブロックごとに発表内容を検討、検討内容について全体に共有
- ・経験年数に分け、事例検討の実施

コーディネーター連絡会 事例検討

検討事項の概要	今できていること等	グループのメンバーからの意見
<ul style="list-style-type: none"> ・訪問介護事業所のスタッフや利用者がコロナに感染した場合の事業の進め方が分からない ・コロナ禍、訪問介護事業所が困った時に身近に相談や教育・指導してくれるシステムが欲しい ・P P E 等が足りなくなる 	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問介護事業所間の助言、情報共有、連携ができるように支援する ・訪問看護と訪問介護事業所が情報を共有する ・互いの困っている点を洗い出す（P P E や感染予防等） 	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問介護事業所と連携して、訪問看護が講師になり勉強会を開催する ・訪問介護事業所連絡会を対面で開催する
<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターが主催している月 1 回開催している区役所、地域包括支援センターとの会議がうまくいっていないので、会議を活性化させたい ・会議の場で相談事例を共有して解決したいと思っているが、コーディネーターが話をしているだけで意見が出ず困っている 	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍でも会議は途切れず開催していた ・事例を当日の会議の場で提示している 	<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターが主催するのではなく、持ち回りで主催を変更してはどうか ・事前に事例を会議に参加するメンバーに示しておくのはどうか

検討事項の概要	今できていること等	グループのメンバーからの意見
<ul style="list-style-type: none"> ・訪問診療について <u>理想</u> 住民が希望したら、かかりつけ医または近隣のクリニックの医師に訪問してもらうことができる <u>現実</u> 訪問診療に行ってもらえる医師が少ない ・区内の医師の高齢化 日々の診療だけで手一杯 今診ている患者の訪問だけで時間がとれない ・在宅診療専門の医療機関が少ないため、新規が取れない 	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅専門医に月1回程度、空き状況の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域別で訪問診療可能な医師リストを作成し、連携してはどうか ・他区の在宅医が訪問診療可能な範囲かコーディネーター間で共有する
<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ陽性者へのサービス提供中止が多かった ・訪問介護が多職種連携の輪に入れず、研修会の参加率も低い ・介護の専門職としてのスキルアップが必要 ・介護の専門職としての認識が、ヘルパーも他職種も乏しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヘルパーさんが介護の専門職として自覚をもち、声を出し連携の輪にしっかり入ってもらうよう支援する ・訪問介護連絡会代表と包括に協力をしてもらっている ・包括圏域ごとにPPE研修会や訪問介護事業所サービス提供責任者の会を開催 	<ul style="list-style-type: none"> ・「気づきシート」を利用した研修会を開催 ・ヘルパーとしての専門性とは何かを考える研修会を開催

③ 区役所及び相談支援室への研修会の開催

区役所実務者、在宅医療・介護連携支援コーディネーター 第2回合同研修会

【日 時】 令和5年2月22日（水） 午後

【内 容】 『薬局・薬剤師との連携』

講師：調整中

【場 所】 福島区民センター

開催予定

④ 地域包括ケアシステム推進研修会 （4事業（地域支援事業）合同研修会）の開催

【日 時】 令和4年11月18日（金） 午後3時～5時

【内 容】 『地域包括ケアシステムの現在地を考える

～可視化から考える地域包括ケアシステムのこれから～』

講師：大阪成蹊短期大学 准教授 鈴木 大介 氏

【場 所】 平野区民センター

実施済

地域包括ケアシステム推進研修会 アンケート結果

【参加者】 185名

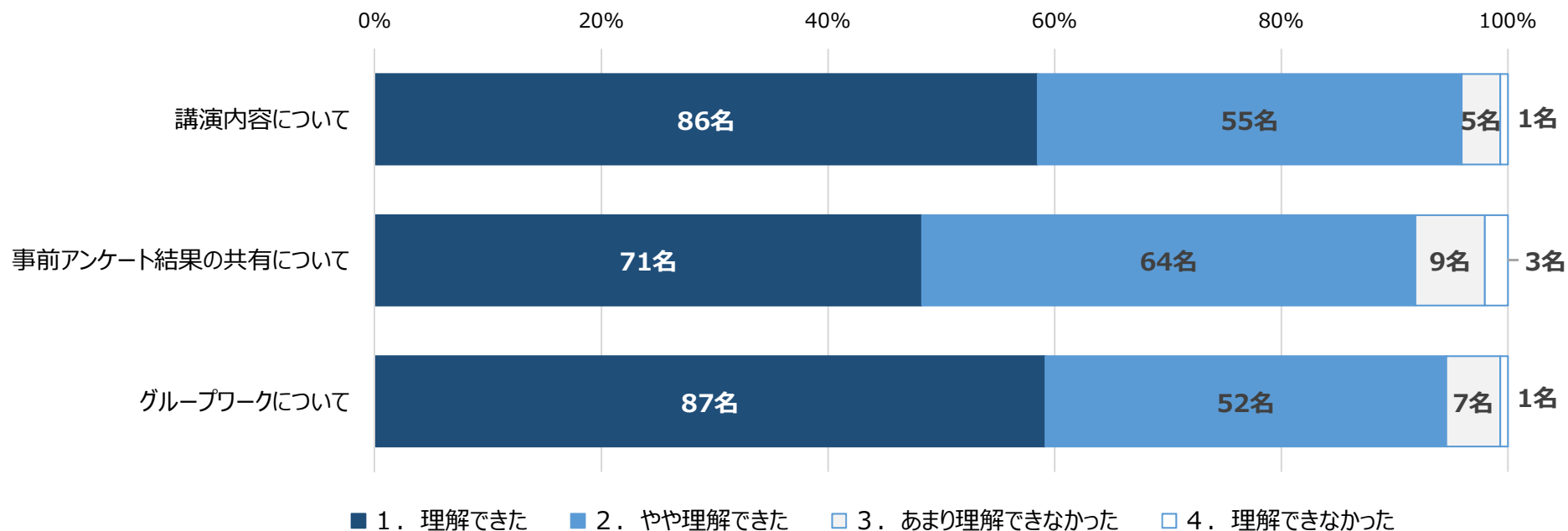
【回収数】 147名（回収率：79.5%）

1) 所属

在宅医療・介護 連携相談支援室	地域包括支援 センター	認知症総合 支援事業	生活支援 体制整備事業	区役所 保健担当	区役所 福祉担当
25	66	25	22	21	26

2) 研修会の理解度について

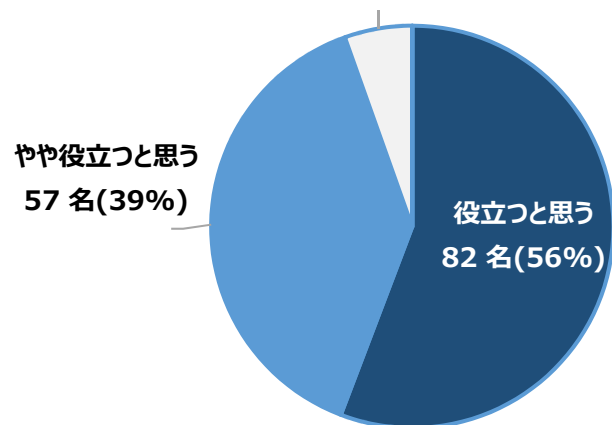
(n = 147)



3) 今後の協働した取組みに対して

(n = 147)

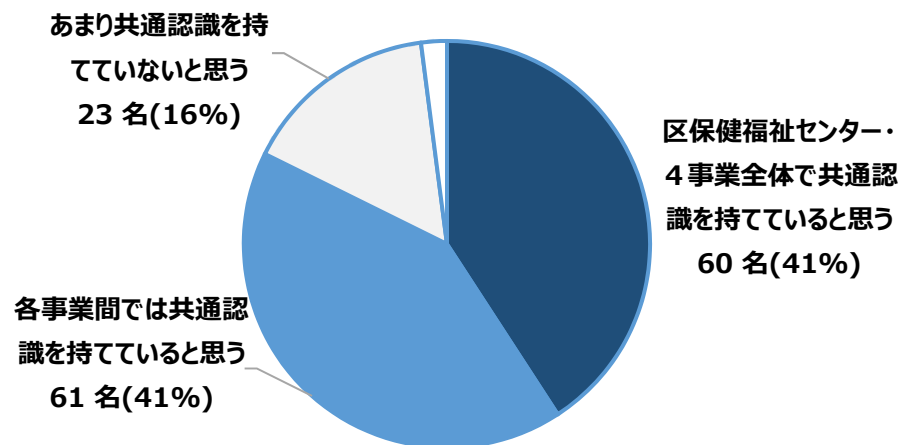
あまり役に立つと思わない 8 名(5%)



4) 地域包括ケアシステムの共通認識

(n = 147)

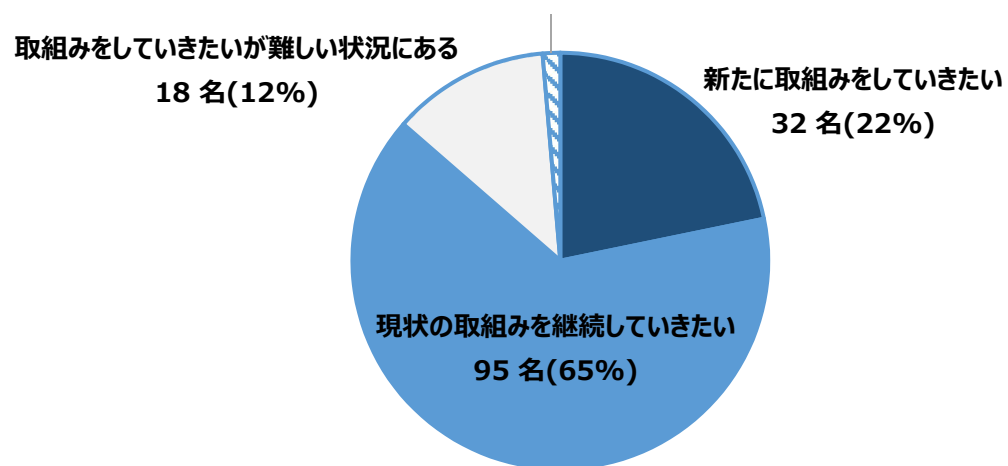
共通の認識を持っていないと思う 3 名(2%)

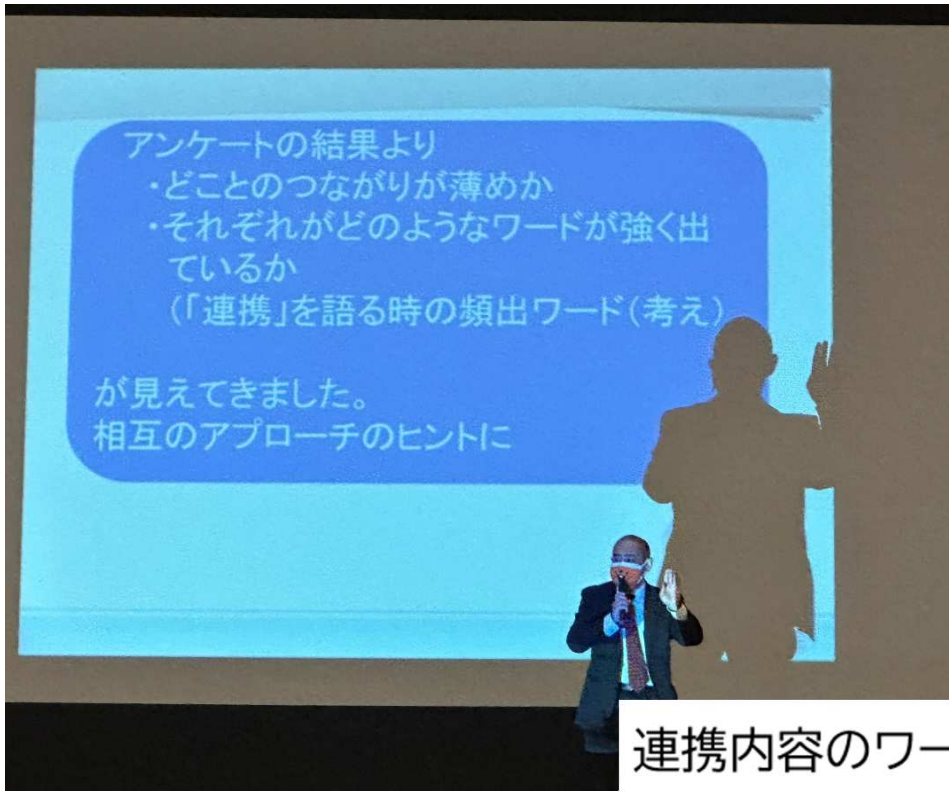


5) 今後の取組みへの意向

(n = 147)

特に取組みたい内容はない 2 名(1%)





アンケートの結果より
・どことのつながりが薄めか
・それぞれがどのようなワードが強く出ているか
(「連携」を語る時の頻出ワード(考え))

が見えてきました。
相互のアプローチのヒントに

連携内容のワードクラウド 在宅医療・介護連携相談支援室



自由記載

- ・連携するにあたり、現状を詳細に知ること（何ができていて、何ができていないのか）が大事であること、連携をする目的を明確にすることが大事であることがわかった
- ・ただつながるだけでなく、つながることによってどのようなニーズに対応できるかが重要という点が理解できた
- ・可視化によって、どこの機関との関係性が薄いのか、他にも新たな機関と関係性を築いていく必要性があるのかを分析していく重要性に気づくことができた
- ・「同じ課題でも各機関によって切り口が違う」という言葉が印象的であった
- ・システムとは個々の取組みではなく、横・縦につながり相互に関係しながら実践できるようにすることがわかった
- ・自区の状況やニーズを可視化することによって、改めて実践に向けた連携が可能になることを学んだ
- ・コロナ禍で地域包括ケアシステムの推進に遅れを感じていたが、区内の関係機関とグループワークにより、これまでの連携の構築を再確認し、また新しく連携できそうな取組みを共有できた
- ・共通した課題がみえ、似たような取組みをしている内容もあるため、情報共有をしながら、協働して取組めたらと思った
- ・連携の相関図を作成して、話し合いができてよかった
- ・多職種の強みと弱みを知り、理解を深めることができた
- ・支援や対応等それぞれの職種で異なり、各職種を理解することが連携する上で大切だと思った
- ・お互い顔の見える関係ですが、改めて話してみて、新たな考えや思いがあることが理解できた
- ・4事業内での連携を中心に考えていたが、他のメンバーから地域住民・団体・学校・商業施設等のインフォーマルな機関も挙げていたので、大変参考になった